

いつの時代でも、中小企業の経営者の最大の悩みごとには資金繰りです。どこの中小企業でも資金が不足していますし、もし、資金繰りに行き詰まれば倒産が待っているからです。特に現在のように、デフレで売上げが伸びない中、金融機関による貸し渋りが続く時代には、資金繰りの悩みがますます大きくなってきています。

また、現代はキャッシュフロー経営が流行になっていることもあり、損益よりも資金の収支に注目が集まる傾向があります。そのためもあってか、最近では、中小企業の経営者や経理担当者だけでなく、一般のビジネスマンも資金繰りに強い関心を持っているようです。

資金繰りとは、文字通り資金をやりくりして資金がショートしないようにすることですが、それを持たず資金繰り表を作って小手先のやりくりをし、資金が足りなければ金融機関から借りてくることととらえている人が少なくないようです。もちろん、資金繰り表の作成も、小手先のやりくりも、必要となるときに金融機関から借入れすることも大切ですが、資金繰りはもともと経営活動の本質的なものとしてとらえる必要があります。

会社の目的は利益を出すことと会社を永續させることにありますが、それはまず、会社が倒産しないこと、それから次に、会社が成長することによって達成することができます。会社が倒産しないこ

とも、会社が成長することも、資金繰りがうまくいっているときにできることなのです。

また、企業経営は資金繰りに始まって資金繰りに終わるともいいます。資金繰りはそれほど会社の経営にとって本質的な問題なのです。

したがって、資金繰りとか資金繰りの改善は、小手先でできるものではないし、経理だけでできることでもないのです。まず、経営者がどうすれば資金繰りが改善されるのかを理解し、資金繰りを改善しようという強い意志を持つことが何より大切です。そして、全社一丸となって資金繰り改善のためアクションをする必要があります。

ところで資金繰りの改善は、資金繰り表ではなく、貸借対照表から考える必要があります。「資金が足りないから借りてくる」というのでは、資金繰りはいつになっても根本的に改善されることはありません。

資金は、まず利益（資本の部）からつくらなければなりません。足りない分は今ある資産（資産の部）から工夫してやりくりをする、あるいは支払い（負債の部）をやりくりして間に合わせる努力が必要です。借入れは現在の貸借対照表項目でやりくりできないときにすべきものです。

資金繰りとはどういうことなのか、どうすれば資金繰りが改善されるのかを理解することは、それほど難しいことはありません。経理の知識がなくても資金繰り表を作成することはできます。ただ、実際に会社の資金繰りを改善しようとすると容易ではないかもしれません。

しかし、本書で紹介した資金繰り改善策を実行できれば、資金繰りがラクになるだけでなく、財務体質の強い、倒産しない会社づくりに役立つはずですよ。

本書で示した108のセオリー（鐘）が、資金繰りの悩み（煩惱）から解放されることに少しでも役立てば、これに勝る喜びはありません。

平成14年10月

高橋 敏則